

ルーブリック評価入門 ～考える、つくる、活用する～

俣野 秀典 (高知大学 地域協働学部／大学教育創造センター 講師)

講師略歴

北陸先端科学技術大学院大学知識科学研究科修了。地域科学研究会・高等教育情報センター研究員、高知大学総合教育センター講師を経て、2015年より現職。放送大学非常勤講師（ファシリテーション入門）。

教育評価や教育方法を中心に、FDを含めた“Educational Development”に取り組む。高等教育開発の専門家として、学生がもっと学べる授業／教職員がさらに学べるワークショップを開発・支援・実施。2010年より担当している本プログラムは毎年最高水準の評価を得ている。関連する著書に『大学教員のためのルーブリック評価入門』（共訳、玉川大学出版部）がある。

プログラム概要

成績評価について、多様な評価基準を設定することが求められております。ある大学の『シラバス入力手順説明書』では、“具体的な評価基準はルーブリック評価シートを事前に配布し、配点30点とする”との例が示されたりしており、「ルーブリックって何??」と戸惑われた教員の方も多いと聞いております。

そこで本プログラムは、成績評価の目的・意義から出発して、高等教育において近年注目が集まっているルーブリック評価についての基本的な考え方を理解することを目的として実施されます。

※ルーブリックとは、「目標に準拠した評価」のための「基準」つくりの方法論であり、評価指標として活用されます。本プログラムでは、学生が何を学習するのかを示す評価規準と学生が学習到達しているレベルを示す具体的な評価基準を示すマトリクスからなる分析的ルーブリックを主に取り上げます。

準備物・事前課題

簡単な事前アンケートを実施する場合があります。

主な受講対象者

- ・ 目標に準拠した評価方法を習得したい教員
- ・ 評価について関心のある教職員
- ・ 協同型アクティブラーニングを体験したい教職員

到達目標

1. 目標に準拠した評価を心がけることができる。
2. ルーブリック評価の意義を説明できる。
3. ルーブリックを授業で活用するための準備ができる。

日時

8月25日(水)9時30分～11時30分

テキストマイニング入門

塩川 奈々美 (徳島大学 高等教育研究センター 助教)

講師略歴

専門は日本語学および方言学。2018年に徳島大学総合教育研究センター（現：高等教育研究センター）教育改革推進部門特任助教を経て、2020年4月より現職。文部科学省大学教育再生加速プログラム（AP）事業における全学的な初年次教育プログラムの実施支援を担当し、学生アンケートや教員アンケートなどの自由記述についてテキストマイニングを活用した質的分析に取り組む。

プログラム概要

皆さんは授業評価アンケート等で回収した自由記述の回答をどのように処理していますか。自由記述の内容をトピック毎にまとめたり、一覧化するに留まっているものも多いのではないのでしょうか。こうした手作業による集計は少ない件数であれば有効な手段となりますが、膨大な件数の回答や、属性別の傾向を捉えたい時等、条件や状況によって処理できる量にも限界があります。

そこで、本プログラムではKH Coderを利用したテキストマイニングについてその方法や事例紹介を行いつつ、実際に参加者の皆さんに体験してもらうことにより、テキストマイニングの基礎を学んでいただくことを目指します。

データの整理の仕方、ソフトの使い方、図の読み方などの基本を押さえ、どのように活用することができるのか一緒に探っていきましょう。

主な受講対象者

アンケートの自由記述やテキストデータを活用した分析に関心がある教職員

到達目標

1. テキストデータの特徴や取り扱う際の注意点を理解し、説明することができる。
2. テキストマイニングソフト「KH Coder」の基本操作を行うことができる。
3. テキストマイニングソフト「KH Coder」を利用して作成した図から解釈を行うことができる。
4. 学んだ方法をもとに、自身の業務での活用案を提案することができる。

日時

8月25日(水)9時30分～11時30分

これだけは押さえない遠隔授業の基礎

藤澤 修平 (香川大学 大学教育基盤センター 特命助教)

講師略歴

平成 24 年香川大学創造工学部実験実習係に採用後、香川大学防災教育センター、四国危機管理教育・研究・地域連携推進機構（危機管理先端教育研究センター）にて技術補佐員として勤務。在職中、遠隔講義システムの維持管理、技術補助業務に従事。令和 2 年度から現職。情報リテラシー関連科目のマネジメントの他、香川大学 Moodle・Zoom に関するサポート、学内向け活用ガイド作成等を行う。

プログラム概要

2020 年以降、全国の大学において、ICT 技術を用いた遠隔授業が急速に普及・発展しました。この新しい環境の中で、けして十分とはいえない準備期間を経て、いち早く環境に適応し十全に遠隔授業をこなした教員も居れば、手探りで LMS やビデオ通話システムを学び、辛うじて遠隔授業をこなした教員も居るでしょう。いずれにせよ、2021 年の今となつては、遠隔授業は（対面授業と同様に）出来て当たり前授業形態となっています。

このプログラムでは、一般的な知識や手法の紹介、香川大学における実践事例の紹介等により、遠隔授業の基礎的な知識を学び、到達目標の修得を目指します。一から学びなおしたい方だけでなく、既に持っている遠隔授業の知識を点検し、不足部分を補う目的の方にも受講いただければと思います。

主な受講対象者

- ・ 遠隔授業について基礎から学びたい教員
- ・ 遠隔授業に関する自身の知識状態を点検したい教員

到達目標

1. 遠隔授業の種類と特徴を説明できる。
2. 遠隔授業の内容に応じて適切な教授方法やアプリケーションを選択できる。

日時

8 月 25 日(水)9 時 30 分～11 時 30 分

中堅職員のための後輩指導 －理論と実践方法－

竹中 喜一（愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室 講師）

講師略歴

専門は高等教育論および教育工学。特に大学教職員の学習と研修転移に関心を寄せている。前職では関西大学事務職員としてFD/SD/教学IRなどの業務と部下数名の育成と評価担当者としての役割を担う。業務と並行して名古屋大学大学院教育発達科学研究科、大阪大学大学院人間科学研究科を修了。博士（人間科学）。主な著書に『大学SD講座4 大学職員の能力開発』（共編著）、『看護教育実践シリーズ1 教育と学習の原理』（分担執筆）などがある。

プログラム概要

大学職員の業務には指導を行う機会が多くあります。メンターなど指導者の役割を明確に与えられる場合もあれば、そうでない場合もあります。指導のしかたは、指導者自身が受けた指導など経験に影響を受けます。しかし、自分にとってよかったと思う指導が指導対象者にとってもよいとは限りません。指導対象者の経験や能力、仕事やプライベートに対する考え方などによって、適切な指導は異なってくるのです。

適切な指導を行うには、指導者あるいは指導対象者の状況によって応用可能な、指導に関する原理を知っておくことが重要です。このプログラムでは、指導対象者の目標設定やフィードバック、説明や問いかけといった指導に活用可能な原理とそれに基づく実践方法を学んでいきます。実践方法にはさまざまな選択肢があることに、参加者のみなさまがもつ実践知の共有も交えながら気づく機会にしたいと考えています。

準備物・事前課題

後輩指導でご自身が工夫しているコツについて、当日お伺いします。特定の場面を想定したものでも、日常的に心がけているものでもかまいませんので、箇条書きで2～3つ程度記述できるよう準備をお願いいたします。

また、『大学SD講座4 大学職員の能力開発』（竹中喜一・中井俊樹編著、玉川大学出版部）をご覧くださいと内容をより理解することができます。

主な受講対象者

後輩指導にあたる職員の方を想定しています（特に、新卒から5～10年程度の経験をお持ちの職員、主任・係長級の職員の方）

到達目標

1. 指導者の役割を説明できる。
2. 指導対象者の学習目標を設定できる。
3. 説明や発問を組み合わせた指導ができる。
4. 指導対象者の学習に対してフィードバックすることができる。

日時

8月25日(水)9時30分～11時30分

大学から地域の元気を応援する取組 ～地域連携の種まき実践例～

三戸 里美 (広島大学 学術・社会連携室地域連携部門 主査)

講師略歴

平成4年4月、広島大学事務職員に採用。広報部で大学ウェブサイトシステム構築等を行い、令和2年度から現職。現在、地域活性化に向けた大学と自治体、地域団体、企業等との連携活動、自治体と連携した国際交流拠点施設（交流、イノベーション、居住機能）の整備、防災・減災研究センターにおける社会連携活動、COC後継事業における学生活動などを担当。

プログラム概要

コロナ禍、大規模自然災害、デジタル化、環境問題、都市への集中など多くの課題に直面している今、自ら「問い」を見つけ、多様な他者とともに広い視野から自分の力で解決の道を探り続ける力を身に着けることが求められています。

そのため、大学においてもキャンパスを飛び出し、地域や社会の中に教育・研究フィールドを求める学生・教員が増えています。そうした中、広島大学では令和元年度に、地域が元気を取り戻すのを支援する地域連携事業「地域の元気応援プロジェクト」をスタートしました。この事業では、自分たちだけでは解決できない課題を持つ地域の方と学生・教員との出会いの場を作り、3者がチームを作って地域をフィールドに地域課題に取り組むものです。本プログラムでは、地域と学生・教員のつながりの拡充や、企画、コミュニケーションなど様々な経験を通じた学生の成長、地域連携のあり方を皆さんと考えてみたいと思います。

準備物・事前課題

ご自身の大学で、興味深いあるいは特徴的な地域連携活動を調べてください。グループワークで簡単に紹介していただきます。

主な受講対象者

広く学生・教員・地域との連携を考えている若手職員、一般職員の方を対象としています。

到達目標

1. 職員が地域連携活動を通じて学生・教員とのネットワークを広げる事例について説明できる。
2. 地域連携事業の大学・地域双方のメリットについて理解する。
3. 地方創生における大学の役割について理解する。

日時

8月25日(水)12時30分～14時30分

パフォーマンス評価のための 課題の作り方

飯尾 健 (徳島大学 高等教育研究センター 助教)

講師略歴

令和2年3月、京都大学大学院教育学研究科博士後期課程(高等教育開発論講座)研究指導認定退学。京都大学高等教育研究開発推進センター研究員を経て、令和2年9月より現職。主な研究テーマは情報リテラシー教育・高等教育学。

プログラム概要

パフォーマンス評価とは、〇×式や多肢選択式、空欄記入式のテストではなく、レポート・論文を含む文章での記述や、実技、成果物の作成等を通じて学生の学習成果を評価する方法です。パフォーマンス評価により、単なる学習内容の記憶だけでない深い理解や、現実に近い場面で学習内容を発揮できるか、さらには知識だけではない判断力や表現力等も評価することが可能です。しかし、その方法は分野や内容、さらにその授業や大学全体が目指す目標に応じて様々な形があり得ます。

このプログラムでは、まずパフォーマンス評価とは何か、どのように自分の授業でパフォーマンス評価を作成したり、既存の課題をパフォーマンス評価に置き換えるかについて、講義とグループワークを用いて理解を深めることを目的としています。

皆さまのご参加をお待ちしております。

準備物・事前課題

自身の授業で行っている課題(グループワークで使用)

主な受講対象者

ルーブリックの利用を含めたパフォーマンス評価に関心がある教員。午前に2501A「ルーブリック評価入門」を受講していると望ましい。

到達目標

1. パフォーマンス評価とは何かを説明することができる。
2. 自身の授業にどのようなパフォーマンス評価がふさわしいかを判断できる。
3. テスト形式の課題をパフォーマンス評価に置き換えることができる。

日時

8月25日(水)12時30分~14時30分

教職員のための「事例から考えるハラスメント」 ～"ニューノーマル" に改めて考える～

末本美千代 (高知大学 総務部長)

吉田一恵 (愛媛大学教育学生支援部愛媛大学SD統括コーディネーター/能力開発室長)

講師略歴

(末本美千代) 昭和55年高知医科大学に文部事務官として採用。基礎医学系講座事務、会計課契約事務、秘書室業務等担当。大学統合、法人化後の平成16年から学務課に配属、SPOD設立当初に担当事務として関わる。平成21年から法人評価、認証評価等業務を担当後、平成27年に学務課へ再配属。高知高専学生課長、高知大学学務課長を経て、令和2年4月から現職。「職員のための講師養成講座」の外、各種SPOD研修プログラムを受講、外部団体主催「ワールド・カフェ×OSTワークショップ」等への参加経験からSPODフォーラム2012で講師を担当。

(吉田一恵) 愛媛大学法文学部法学科卒業。文部事務官として愛媛大学各部局、国際交流センターにおいて主に総務、国際交流を担当。法人化を挟み、広報室長、人事課長、教育学生支援部長を経て平成29年4月から現職。広報室・人事課での約6年間愛媛大学危機管理室副室長を兼務し、記者会見を所掌、報道対応マニュアル等を作成、人事課では、主に人材育成・評価、労務、男女共同参画、人権侵害事案等々に対応、全事務系職員へのスタッフポートフォリオの導入も実施、教育学生支援部では、入学から就職までの学生支援活動、危機管理事案に対応するとともに、現在まで一貫して教職員能力開発拠点SDC/SPOD-SDCとして学内・外において、年間約40件の研修講師他、SDの企画・立案の支援等、職員の能力開発に取り組んでいる。

プログラム概要

あなたが、今、何気なく行っているその言動は、ハラスメントではありませんか？

本プログラムでは、大学等において、今、身近にあるハラスメントについて説明すると共に、ハラスメントが起こった時の初期対応、未然に防ぐための気づきについて考えます。特に、新しい危機「コロナ禍」においては、在宅勤務の外、授業・会議等でオンラインを駆使した日常が当たり前となってきました。このニューノーマルにおいて、複雑かつ多様化するハラスメントについて、具体的事例を挙げながら、「ケースメソッド」により省察し、①ハラスメント認定のポイント、②ハラスメントが起きた場合の対処方法、③ハラスメント「施策」を導き出していきます。

主な受講対象者

- ①ハラスメントに対する基礎知識を得ようと思っている教職員
- ②ハラスメントに対する知識を最新のものにしたいと思っている教職員
- ③攻めのハラスメント防止策を考えたいと思っている教職員
- ④正に、ハラスメントに直面している教職員
- ⑤現に、ハラスメントを見聞きしている教職員

到達目標

1. ハラスメントについて、説明することができる。
2. ハラスメントの事実認定ができる。
3. ハラスメントに対処できる。
4. ハラスメントの予防対策を構築することができる。

日時

8月25日(水)12時30分～14時30分

事例で考える教職課程における 多様な履修相談対応

小野 勝士 (龍谷大学 社会学部教務課)

講師略歴

関西学院大学大学院法学研究科民刑事法学専攻博士課程前期課程修了。修士(法学)。平成13年度から龍谷大学に勤務し、教学部、経理課、文学部教務課、世界仏教文化研究センター事務部を経験し、令和2年から現職。大学教務実践研究会代表。関連する著書に『教職課程事務入門』シリーズの【1】～【3】(いずれもジダイ社)がある。

プログラム概要

ある日電話で「1999年に卒業したのですが、これから教員免許状を取得したいのですが、どのようにすればよいのでしょうか?」とかかかってきたときどのように対応しますか?

このような卒業生等からの相談について、どの入学年度のカリキュラムを適用するか等個別対応になる場合がほとんどだと思われます。

本プログラムでは、学生配付の学修の手引きでは対応できない事案について掘り所となる法令を紹介します。そして、学んだ知識の業務への活用方法について、ワーク(個人)を通じて体験することで教職課程の窓口対応力の向上を目指します。

(2019年度も同テーマで実施しましたが、扱う事例については変えております。)

※中高一種免を事例に取り扱います。

1. 自己紹介
2. 事例(時折、個人でワークを行います)
3. 参考書籍・セミナーの紹介

主な受講対象者

中学または高等学校教諭免許状設置課程のある大学・短大において教職課程の履修相談を担当している教職員。

到達目標

1. 法令を理解したうえで正確に不足単位の説明をすることができる。
2. 履修相談にあたって必要な情報が掲載されているウェブサイト等を提示することができる。
3. 想像力を働かせて履修相談に対応する姿勢を身につけることができる。

日時

8月25日(水)12時30分～14時30分

学生支援に関わるカウンセリング入門

杉田 郁代 (高知大学 大学教育創造センター 准教授)

講師略歴

専門は、高等教育、学生支援。2009年に環太平洋大学次世代教育学部講師、同准教授、比治山大学現代文化学部准教授などを経て、2018年より現職。学生総合支援センター兼務。臨床心理士、学校心理士。現在、学生総合支援センターにおいて、相談支援を行っている。

プログラム概要

学生支援に関わる部署では、学生に接する場面が多くあります。学生に接する場面では、学生に寄り添い、学生のニーズを把握し、一緒に解決の糸口を見出すこともあるのではないのでしょうか？そのようなときには、カウンセリングスキルが、役に立ちます。本プログラムで取り扱うカウンセリングスキルは、学生の大学適応に向けた支援の際に用いる基本的な技法を取り扱います。また、このカウンセリングスキルは、多くの場面に応用できます。

本プログラムは、具体的な事例を交えたワーク型で進めていきます。複数の事例を提示し、グループで対応を考えるとともに、ロールプレイを用いて、実際に体験してもらいます。体験することによって、カウンセリングスキルについて理解を深めていきます。また、ワークショップ形式ですので、参加者の皆さんとともに、一緒に学んでいきましょう。

主な受講対象者

学生支援関連部署に関わる教職員。カウンセリングの基本的な技法を取り扱いますので、入門者も参加しやすいプログラムに設計しています。

到達目標

1. 学生支援において、必要なカウンセリングの基本技法について説明できる。
2. 学生支援に必要なカウンセリングの姿勢について、説明できる。
3. 「学生中心の大学」の実現のためにより学生支援ができるようになる。

日時

8月25日(水)15時00分～17時00分

若手職員向け超入門！ 研究者と学術情報流通

井上 昌彦（関西学院大学 図書館 課長補佐）

講師略歴

図書館情報大学卒業、大阪市立大学大学院創造都市研究科前期課程修了（都市情報学）。
就任以来、大学図書館・短期大学図書館・研究推進社会連携機構に配属される。これまでの担当業務から、学術情報流通の変容と今後のあり方、それを通じての研究者支援について、強い関心を持つ。

プログラム概要

「科研費」、「査読」、「インパクトファクター」、「電子ジャーナル」、「研究評価」、「オープンアクセス／オープンサイエンス」…。若手職員の皆さんも、これらのいくつかは耳にしたことがあるでしょう。では、これらについて、皆さんはどれくらいご存じでしょうか？

皆さんがこれから研究者を支援していくためにはまず、研究者を取り巻く世界について知ることが大切です。

研究者を取り巻く世界は、ドラスティックに変化しています。研究環境とともに、研究者の知的生産物である学術情報（論文等）も、そのあり方を劇的に変えています。

このプログラムでは以下の3つのポイントを通じ、研究者を取り巻く世界と今後の支援のあり方について考えます。

<3つのポイント>

- ・研究環境の変化
- ・学術情報流通の変化
- ・大学（とりわけ図書館）の果たすべき役割

主な受講対象者

大学職員。特に本プログラム内容について、業務上接する機会の少ない一般職・若手を歓迎します（大学図書館員も歓迎）。

大学職員向けに基礎からゆっくりと話しますので、教員や研究支援に携わる職員など、本テーマに関する基礎的な知見を有する方や当事者は、受講する必要がありません。

到達目標

1. 研究環境と学術情報流通の変化を通して、研究者を取り巻く世界を理解し、説明できるようになること。
2. 大学（図書館）の果たすべき役割や方向性を、イメージできること。
3. 自分なりの問題意識や関心を持ち、長期的に研究者に寄り添えるようになること。

日時

8月25日(水)15時00分～17時00分

e-Learning による 数理・データサイエンス教育

林 敏浩 (香川大学学長特別補佐、創造工学部 教授、大学連携 e-Learning
教育支援センター四国センター長、総合情報センター副センター長)

講師略歴

平成元年3月 徳島大学工学部情報工学科卒業、平成6年徳島大学にて博士(工学)の学位取得。平成6年より佐賀大学理工学部講師、平成17年より香川大学総合情報基盤センター准教授、平成25年より香川大学総合情報センター教授。教育工学を専門として、大学全体の教育支援システムを含むコンピュータ・ネットワークシステムの導入、運用、管理、利活用支援まで広範に担当。

プログラム概要

Society 5.0 で実現する社会で、論理的思考能力や規範的判断力に基づき柔軟に対応できる人材育成が急がれています。このような社会要請に基づき、香川大学に入学した学生が文系理系を問わず初年次に身につけるべき数理・データサイエンスの基礎を学習するために、令和2年度より、1年次生対象に開講される必修科目として「情報リテラシーB」を e-Learning で提供しています。

このプログラムでは、まず、本学で開講している情報リテラシーB の設計について説明します。さらに、オンデマンド型 e-Learning として、どのように授業運用しているかについて技術面も含めて説明します。これらをたたき台として、e-Learning による数理・データサイエンスの基礎科目の利点や欠点を検討します。参加の皆様とのディスカッションを通して一歩進んだ数理・データサイエンス科目の運用方法を検討できればと思います。

主な受講対象者

カリキュラムの開発や評価に関わる教職員

到達目標

1. 数理・データサイエンスで何を教えるべきか説明できる。
2. 数理・データサイエンスのための授業の要件を説明できる。
3. 数理・データサイエンスのための e-Learning による授業運用の利点と欠点を説明できる。

日時

8月25日(水)15時00分~17時00分

カリキュラムの編成方法

中井 俊樹 (愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室長 教授)

講師略歴

専門は高等教育論および人材育成論。1998年に名古屋大学高等教育研究センター助手、同准教授などを経て2015年より現職。学長特別補佐、教育・学生支援機構副機構長、教育企画室長などを担当。愛媛大学の教育の質向上に向けたFD、SD、IRを始めとした諸活動の企画、実施、評価に加え、教職員能力開発拠点の活動として他機関における研修や組織開発支援を行う。近著として、『大学SD講座2 大学教育と学生支援』（編者、玉川大学出版部、2021年）、『大学SD講座3 大学業務の実践方法』（共編者、玉川大学出版部、2019年）、『大学SD講座1 大学の組織と運営』（編著、玉川大学出版部、2019年）などがある。

プログラム概要

教学マネジメントや内部質保証の体制を構築することが大学に求められるようになっていきます。しかし、教学マネジメントや内部質保証の体制は、教育目的を達成するカリキュラムを編成するための手段であることを理解しておくべきでしょう。

大学におけるカリキュラムは考慮すべき点が多く、編成することは簡単ではありません。このプログラムでは、各大学でカリキュラムをどのように編成することができるのかについて論点とさまざまな実践事例を紹介することで、みなさんの所属大学に適したカリキュラムの編成の方法を明確にしていきます。

みなさんには所属大学の3つのポリシー、学生便覧、カリキュラム評価の報告書といったカリキュラム関連資料を手元に置いていただき、ディスカッションやグループワークなどの活動に積極的にそして建設的にプログラムに参加することを期待しています。

準備物・事前課題

(準備物) 所属大学のカリキュラム関連資料(3つのポリシー、学生便覧、カリキュラム評価の報告書など)

(事前課題) 下記の文献をあらかじめ読んでおいてください。

<https://www.jaedweb.org/newspaper> において公開されています。

- ・中井俊樹(2020)「カリキュラムの構成要素を理解する 上」『教育学術新聞』令和2年5月27日号
- ・中井俊樹(2020)「カリキュラムの構成要素を理解する 下」『教育学術新聞』令和2年6月10日号

主な受講対象者

カリキュラムの編成や評価に関わる教職員

到達目標

1. 大学のカリキュラムの特徴と編成の基本原則を説明することができる。
2. 所属組織のカリキュラムの特徴と課題を抽出することができる。
3. カリキュラムの課題に関する基本的な課題解決の方法を提案することができる。
4. 他機関の教職員と共に学び合う雰囲気づくりに貢献できる。

日時

8月25日(水)15時00分～17時00分

若手職員のための タイムマネジメント入門

井上 慎二（高知大学 総務部総務課 専門員（法規担当））

講師略歴

平成 15 年 4 月高知医科大学採用。病院人事、法人企画、総務法規業務に従事し、令和 2 年 4 月より現職。平成 29 年度 SPOD 主催「次世代リーダー養成ゼミナール」修了。SPOD や自大学の SD 研修において講師を担当。

プログラム概要

このプログラムは、新任職員や若手職員の皆さんに、仕事上の時間管理の基本的な考え方や技術について理解していただくことを目的とするプログラムです。

このプログラムでは、最初に皆さん自身の「仕事上の時間管理に関する悩みや問題点」を明らかにしたうえで、タイムマネジメントの必要性、タイムマネジメントの基本を確認します。次に、具体的なタイムマネジメントの手法として、スケジュール管理の手法を説明するとともに、作業の優先順位をつける際の考え方、「段取り」の工夫について紹介し、個人ワークやグループワークを通じて理解を深めていただきます。そして最後に、全体を振り返るとともに、皆さん自身の日常業務への展開を図っていただきます。

プログラムを通じ、自身を振り返り、また、同じ大学職員である講師や他の受講生の考えや工夫を知ることによって、皆さんの悩み解決の「ヒント」がきっと見つかると思います。

なお、このプログラムは、SPOD「大学人・社会人としての基礎力養成プログラム（新任職員）」の「タイムマネジメント入門」をベースにしており、内容が重複しています。

主な受講対象者

- ・採用後 3 年程度までの係員（新任職員の受講を歓迎します。）
- ・タイムマネジメントの基本について改めて整理する機会を持ちたい若手職員

到達目標

1. 業務上の個人・係レベルのスケジュールの計画・管理を行うことができる。
2. スケジュールの優先順位をつけることができる。
3. 段取りの基本テクニックを習得し、日常業務への展開を図ることができる。

日時

8 月 26 日(木)9 時 30 分～11 時 30 分

理工系授業における発問を 中心にすえたクラスデザイン

榊原 暢久 (芝浦工業大学 教育イノベーション推進センター 教授)
吉田 博 (徳島大学 高等教育研究センター 准教授)

講師略歴

(榊原暢久) 北海道教育大学(札幌校) 小学校教員養成課程卒業。北海道大学大学院理学研究科数学専攻博士課程単位取得退学。博士(理学)。旭川工業高等専門学校助手・助教授、茨城大学工学部講師、芝浦工業大学工学部准教授・教授を経て、2019年4月より現職。ファカルティ・ディベロッパー、SDコーディネーター。

日本高等教育開発協会理事、大学教育学会、日本数学教育学会等所属。専門は高等教育開発(特に、理工系数学基礎教育や教員支援(FD)プログラム)。

(吉田博) 愛媛大学理学部数理科学科卒業。同大学院理工学研究科数理科学専攻博士前期課程修了。2009年度から徳島大学で全学FDプログラムの企画・運営に携わる。また、四国地区大学教職員能力開発ネットワーク(SPOD)のFD担当として、SPOD-FDプログラムの企画立案、調査研究に携わる。

日本高等教育開発協会、大学教育学会、初年次教育学会等所属。

プログラム概要

理工系の専門的知識の習得や研究を行っていく上で基盤となるのは、各学科の必須科目等で学ぶ基礎知識です。基礎知識を習得するための基礎科目の授業は、大人数、講義形式によって行われることが多くあります。本プログラムでは、このような理工系基礎科目における講義形式授業の中で、学生の主体的な学びを促進することに繋がる「発問」を中心的に取り扱います。具体的には、1回の授業で学生に達成してほしい到達目標を設定し、ワークシートをもとに導入・展開・まとめの構成で授業計画を作成し、特に展開部で「発問」をどのように取り入れていくかを考えます。プログラムの中で、インストラクショナルデザインの理論や、実際の授業事例を紹介し、講義と参加者同士のワークを行いながら進めていきます。参加者のみなさんがアイデアを持ち寄ることで、自身の授業における課題解決のヒントや、今後の新しい実践のヒントが見つかることを期待しています。

準備物・事前課題

参加者が担当する講義科目のシラバス1つ(講義を担当されていない教職員の方は、自校で実施している理工系講義科目のシラバス1つ)を持参のこと。

主な受講対象者

- ・自身の理工系の講義形式授業の中に、「発問」の手法を取り入れたい教員
- ・自身の理工系の講義形式授業の中で行っている1回の授業設計を他の教員と共有し、改善のヒントを得たい教員
- ・自身の理工系の講義形式授業を振り返り、基礎的な再構成の方法を知りたい教員

到達目標

1. 理工系講義形式授業に「発問」を取り入れる方法を修得することができる。
2. 理工系講義形式授業における1回の授業構成をふり返り、成果や課題、改善点を明らかにすることができる。
3. 理工系講義形式授業の取り組みについて他者と話し合うことで、自身の授業における課題解決のヒントを得ることができる。

日時

8月26日(木)9時30分~11時30分

学生との関係から考える教職員の倫理

上月 翔太 (愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室 特任助教)

講師略歴

専門は高等教育論、文芸学。日本学術振興会特別研究員、大阪大学大学院文学研究科文化表現論専攻助教などを経て2020年より現職。FDを始めとした諸活動の企画や実施に加え、大学における人文学、芸術教育について調査研究も行っている。大学のみならず学習塾や予備校、専門学校などの教育機関、企業で、多様な学習者を対象とした教育経験をもつ。『大学SD講座2 大学教育と学生支援』において「多様な学生の支援」の章の執筆を担当。

プログラム概要

「オンライン授業で学生のカメラはオンとオフのどちらがよいでしょう？」

これは倫理にかかわる問題だといえます。教育の現場では倫理について考えるべき場面が多くあります。「すべきこと」と「すべきでないこと」があります。「よい」「わるい」が状況次第で変わることもあります。ルールになくても「してはいけないこと」もあります。

本プログラムではまず倫理とは何か、なぜ倫理を考える必要があるのかについて基本的な枠組みを紹介します。そして、大学という組織における倫理について倫理綱領などを素材に捉えていきます。そして、学生と接する場面で倫理的な問題がどのように生じるのかを考えます。

プログラムを通じて、大学教育における倫理的な問題にはどのようなものがあるのかを皆さんと共有したいと思います。倫理という点から自身を振り返り、日常的な場面で倫理的な問題を発見できるようになることを目指します。

準備物・事前課題

ご自分の大学の倫理綱領などがあれば一読しておいてください。

主な受講対象者

学生と日常的に接することの多い教職員

到達目標

1. 教職員になぜ倫理が求められるのか説明できる。
2. 組織の倫理に関する考え方を説明できる。
3. 学生との関係における倫理的な問題を指摘することができる。

日時

8月26日(木)9時30分～11時30分

業務の見直しと改善

-ジョブ・クラフティング概念と ECRS を用いて-

村山 孝道 (京都文教中学高等学校 事務長)

講師略歴

1996年に京都文教学園に入職後、大学の教務畑を中心に歩み、その後総務（学長秘書）や企画（教学企画）などの業務に従事。2021年4月より現職。大学コンソーシアム京都 SD 研修委員長、大学行政管理学会理事・研究研修委員等を歴任し、大学職員の人材開発に携わっている。現在、同志社大学大学院総合政策科学研究科博士後期課程に在籍し、大学職員の HRM（Human Resource Management: 人的資源管理）研究に従事している。

プログラム概要

大学職員の担う業務は年を追うごとにますます複雑化し、高度化しています。次々に現れる新しい仕事を前に目の前の仕事をこなすのがやっとなという大学職員は多いかもしれません。見方を変えれば活躍の場が増えているとも言えるでしょう。期待に応えるためには、まずは目の前のルーティン業務を見直し余力を捻出する必要があります。また、変化の激しい環境では上司がすべてを把握し、職務を設計して職員に与える、という伝統的なトップダウン・アプローチでは対応が難しくなっています。個々の職員は、与えられた業務を受動的にこなす存在ではなく、①仕事そのもの、②仕事を取り巻く他者との関係性、③仕事の意味や意義、を常に見直し再生産する存在（ジョブクラフター）となること、かつて無いほど求められています。本プログラムでは、それぞれが持ち寄った具体的な課題を、2つの概念を援用しつつ、グループワークを通じて業務改善プランを考えます。

主な受講対象者

係長相当級までのプレイヤーとしての職員及び、プレイヤーの意識や業務方法に変化を生みたいと考える管理職職員

到達目標

1. ジョブ・クラフティング概念を説明することができる。
2. ECRS 理論を説明できる。
3. 自身の担当する業務上の課題を一つ以上とりあげ、その改善策を提案できる。

日時

8月26日(木)9時30分～11時30分

トッパーリーダーセミナー

「学位プログラムをいかにマネジメントするか」

山本 啓一（北陸大学 経済経営学部 教授）

講師略歴

1999年一橋大学法学研究科博士課程修了。博士（法学）。2001年九州国際大学法学部。2008年から2012年まで同大学法学部長をつとめ、初年次教育改革、カリキュラム改革等を手がける。2016年より北陸大学。2017年から2020年まで経済経営学部長をつとめる。4年間で経済経営学部の志願者を4.0倍、入学者を2.5倍に増加させた。初年次教育学会理事。『北陸大学経済経営学部の経験と課題 - 教学マネジメント体制の構築に向けて-』（IDE 2020年11月号）、「コロナ禍におけるリスクマネジメント～北陸大学の事例」『大学マネジメント』Nov、2020など。

プログラム概要

近年、「学長のリーダーシップ」のもとで大学改革が進む一方で、「学部が動かない」という声も聞かれることが多い。学位プログラムレベルのマネジメントの必要性が高まっている。

講師は（全く特色の違う）2つの大学で学部長職をつとめた。それらの経験をふまえ、学位プログラムのマネジメントには次の5つの観点が必要だと考える。

- ①「差別化戦略」にもとづくコンセプト及びポリシーの策定
 - ②正課カリキュラムを通じた「質保証」を実現する教育改革
 - ③教職員の「組織開発」を通じた協働体制と「インクルーシブな教育環境」の構築
 - ④ステイクホルダー（高校、保護者、地域、企業）との「関係構築」
 - ⑤以上を「学修者本位」の観点から「有機的に関連」させるシステム作り
- 以上の話題提供をもとに、学位プログラムのマネジメントに関するポイントや課題について、グループディスカッションや全体討議を通じて、参加者全員で考える機会としたい。

準備物・事前課題

所属大学のカリキュラム関連資料（3つのポリシー、学生便覧等）

主な受講対象者

カリキュラム・マネジメントや教学マネジメントに興味関心のある教職員

到達目標

1. 本プログラムに参加する教職員同士で、ともに学び合う雰囲気作りに貢献できる。
2. 学位プログラムをマネジメントするためのポイントや課題について、講師が提供する話題をふまえ、自分なりの意見を述べることができる。
3. 自分自身の経験をもとに、学位プログラムのマネジメントに関して、自大学で今後取り組むべきことを説明できる。

日時

8月26日(木)12時30分～14時30分

オンライン授業で アクティブラーニングに挑戦しよう

金西 計英 (徳島大学 高等教育研究センター 教授)

講師略歴

徳島大学教育学部卒業。鳴門教育大学大学院学校教育研究科修了。2000年、博士(工学)を徳島大学より取得。関西学院大学、金沢工業大学、四国大学を経て、1999年より徳島大学へ。2009年より徳島大学大学開放実践センター教授。高等教育のe-Learning活用についての研究に取り組む。また、高等教育におけるICT活用の授業実践の研究にも取り組む。

プログラム概要

コロナの感染拡大により、2020年は多くの大学でオンライン授業が実施されました。多くの教員にとって、オンライン授業の実施は、準備の整わないままの見切り発車の部分もあったと思います。2021年度も全面的に対面授業へ戻すという状態にはなっていません。そこで、2021年の夏、自らのオンライン授業を振り返る、あるいは、バージョンアップしてみようと思いませんか。

そこで、オンラインでのアクティブラーニングについて、みなさんと一緒に考えたいと思います。2020年にみなさんのおこなったオンラインの授業実践のノウハウについて、参加者一同で共有し、深めたいと思います。これまでのオンライン授業の概要についての知識のまとめと、オンラインでのグループワークの体験を通じて、オンライン授業でのアクティブラーニングについて学んでいきます。みなさんが2021年の秋の授業からオンラインでのアクティブラーニングが実施できるように背中を推す役割が果たせればと思います。

主な受講対象者

オンラインでアクティブラーニングを実施してみたいけれど、どうやればよいか分からず困っている教員の方を歓迎します。学務系の職員の方も、オンラインのアクティブラーニングの理解を深めたい、アクティブラーニングを実際に体験してみたいという方は歓迎します。

到達目標

1. オンライン授業の構成方法等について説明できる。
2. オンラインでのアクティブラーニングの実施方法について説明できる。
3. オンラインでのアクティブラーニングの授業設計ができるようになる。

日時

8月26日(木)12時30分～14時30分

PowerQuery for Excel を用いた 効率的なデータ処理

高畑 貴志（高知大学 大学教育創造センター 講師）

講師略歴

平成 10 年東京大学にて博士（学術）の学位取得。平成 12 年より大阪大学大学院基礎研究科助手。平成 15 年より、高知学園短期大学で情報教育に携わり、看護師養成課程の統計処理の授業などを担当。平成 27 年度から湊川短期大学で情報教育・初年次教育に携わり、平成 29 年に IR 委員会委員。平成 30 年からは、高知大学で e-ラーニングや教学 IR 分析を中心に担当。

所属学会：日本オペレーションズ・リサーチ学会、日本医療情報学会、日本教育工学会。

プログラム概要

Power Query は、Excel の比較的新しい機能です。Power Query を使うと、以下のようにデータ処理を効率的に行うことができます。

- ・データ処理は一連の操作として記録されて元のデータに適用されるため、途中の状態の表を保存することなく、操作ステップの削除、追加、修正により、データの処理方法を試行錯誤できる。
- ・一度行った集計は、別のデータ／更新されたデータに容易に適用できる。
- ・一度行った集計は、抽出条件を変更しても容易に適用できる。
- ・テーブル（表）を結合できる。
- ・ワイド形式（学生毎に 1 行のアンケートデータ）とロング形式（回答ごとに、回答者、質問番号、回答内容を 1 行で格納）を相互に変換できる。

このプログラムでは、Power Query によるデータ処理の手順を実際に体験することで、基本的な概念と操作方法を身に付けていただきます。選択肢が文字列で記録された 5 件法アンケートの回答データと学籍データを結び付け、学部ごとに各項目の平均値を求める作業を題材に予定しています。

準備物・事前課題

本プログラムは、オンデマンド研修です。講義資料を見ながら、模擬データを使い、ご自身の手を動かして、Power Query でのデータ処理を体験していただきます。確認用の簡単なクイズを提供し、質問用にオンラインフォームを用意します（頂いた質問と回答は全受講者間で共有します）。また、SPOD フォーラムのプログラム上の時間帯には、Zoom を用いて質問等に対応いたします。

受講には、Windows のデスクトップ版の Excel 2016、Excel 2019、Office365 版 Excel のいずれかをご用意ください。

主な受講対象者

日常の業務でデータ処理を多く行う教職員、特に、以下のような経験をされている方に適した内容です。

- ・同じようなデータ処理を何度も繰り返すことがある
- ・データの集計のために試行錯誤を繰り返すことがある
- ・Power BI を使用することがある（Power Query は Power BI にも組み込まれているため）

到達目標

1. Power Query を用いて、複数の Excel 表のデータを結合して、特定の条件に適合する対象のみを抽出して集計した結果を Excel の表として取得するという一連の集計手順を実行できる。
2. 抽出条件を変更して同じ集計を適用できる。
3. 元データを入れ替えて同じ集計を適用できる。
4. ワイド形式とロング形式のデータを相互に変換できる。
5. Power Query を自分の大学の業務で活用できる場面を挙げることができる。

日時 8月26日(木)12時30分～14時30分

教務関連法規の考え方と根拠の活かし方

宮林 常崇 (東京都公立大学法人 東京都立産業技術大学院大学管理課 課長)

講師略歴

公立大学法人首都大学東京(現 東京都公立大学法人)に入職後、首都大学東京(現 東京都立大学)で教務畑を中心に歩み、文部科学省へ出向した後、教務課係長、国際化推進本部担当係長、日野キャンパス庶務係長、URA 室長、企画広報課長等を経て2020年4月から現職。主に職員対象の研修会やセミナーにおいて人材育成に関する報告・発表を行っている。

公立大学協会共通テキスト編集チームリーダー、名古屋大学高等教育研究センター教務系SD研究会・大学教務実践研究会事務局長、公立大学職員SDフォーラム代表。著書に『大学業務の実践方法』(共編著)、『大学教育と学生支援』(分担執筆)、『大学の組織と運営』(分担執筆)などがある。

プログラム概要

教務事務では学内規程等が想定していない事案が少なからず生じます。この場合、類似事例に照らす等により現場で都度判断せざるを得ないのですが、教務事務関連法規の考え方が十分に身につけていないと、事例を誤って解釈してしまう可能性があり、円滑に対応することができません。

この研修では、法規の基本を確認した後、教務事務の現場で起こるケース(退学や休学・単位認定・編入学・授業時間と回数の関係 等)を題材としたグループワークや、窓口対応(成績問い合わせ 等)の自己点検・評価、職場における実践的な知識の継承方法の理解などにより、大学教育を支援する職員に求められる基本的な知識や心構えを身につけます。

※ ブレイクアウトルームでは音声をおんにして、ご自身の考えをグループ内でお話いただきます。

※ プログラムの半分程度は、大学教務実践研究会が毎年開催している「教務系職員初任者講習会」と同一です。

主な受講対象者

- ・教務事務を担当して1～3年目程度の職員
- ・教務事務の経験はあるが、根拠を意識して業務を遂行したことがあまりない職員
- ・教務事務の経験はないが、教務事務関連法規の考え方に触れてみたい職員(会計や施設管理といった「管理部門」の方にも、高等教育機関で働く上で大切な視点を身につけることができます)

到達目標

1. 大学教育を支援する職員に求められる基本的な知識や心構えを身につけることができる
2. 担当業務の根拠を自分で調べることができる
3. 教務事務を取り巻く制度(単位認定や退学・除籍など)の根拠と実務の差を説明できる
4. 教務事務として適切な対応ができる
5. 実践的な知識を継承することができる

日時 8月26日(木)12時30分～14時30分

コロナ後の世界/大学教育はどう変わっていくか？

講師

大森 昭生（共愛学園前橋国際大学／共愛学園前橋国際大学短期大学部 学長）

1996年に学校法人共愛学園に入職、共愛学園前橋国際大学国際社会学部長、副学長等を経て、2016年より現職。専門はアメリカ文学で特にヘミングウェイを研究。中央教育審議会大学分科会、同質保証システム部会、同教学マネジメント特別委員会、内閣官房「地方創生に資する魅力ある地方大学の実現に向けた検討会議」等の他、群馬県内での各種審議会等の委員を多数務める。全国の学長が注目する学長ランキング4位（大学ランキング 2022）

喜久里 要（早稲田大学 リサーチイノベーションセンター 知財・研究連携担当課長）

2003年文部科学省に入省。初等中等教育局児童生徒課でいじめ自殺問題への対応を経験。2009年7月より高等教育局大学振興課・私学助成課で大学行政に6年間携わる。2013年大阪大学に Outreach、総務企画部経営企画課長として勤務し、SGUなど大学改革の企画立案を担当。2015年10月早稲田大学職員に転身し、2018年11月より現職。学会や勉強会、大学での講演活動も精力的に行っている。

佐藤 浩章（大阪大学 全学教育推進機構 教育学習支援部 准教授）

専門は高等教育開発。2002年に愛媛大学大学教育総合センター教育システム開発部講師となり、同大教育・学生支援機構教育企画室准教授、副室長などを経て、2013年より現職。著書に『授業改善』（共編著）、『講義法』（編著）、『大学のFD Q&A』（編著）、『実務家教員への招待』（共著）、『大学の質保証とは何か』（共著）、『大学教員のための授業方法とデザイン』（編著）、訳書に『大学教員のためのルーブリック評価入門』（監訳）などがある。

指定討論者

岩崎 貢三（高知大学 理事（教育担当）・副学長）

1985年京都大学大学院農学研究科農芸化学専攻修士課程修了、1987年農学博士の学位取得。2006年より高知大学農学部教授。その後、副学長（教育担当）、学生総合支援センター長などを歴任。2020年4月より現職。専門分野は植物生育環境学、植物栄養学。

司会

塩崎 俊彦（高知大学 大学教育創造センター長）

プログラム概要

2020年、COVID-19の感染拡大は、キャンパスのロックアウト、オンライン授業、学生の経済的困窮や精神的孤立など、さまざまな形で高等教育にも影を落としました。これまでは顕在化してこなかったさまざまな問題がCOVID-19の感染拡大が引き金となって表面化したものということができるでしょう。

全面オンラインで開催される本年度のシンポジウムでは、コロナ後の社会における高等教育のあり方について、参加者の方々とともに理解を深める機会と致します。

主な受講対象者 教職員（SPODフォーラム2021に参加される全ての方）

日時 8月26日（木）15時00分～17時00分

「学生が育つ」ゼミの作りかた

豊田 義博 (高知大学 客員教授)

講師略歴

1983年東京大学理学部卒業後、リクルートに入社。1999年リクルートワークス研究所発足とともにその一員となり、研究員として、20代の就業実態・キャリア観・仕事観、新卒採用・就活、大学時代の経験・学習などの調査研究に携わる。現在は、リクルートワークス研究所・特任研究員、ライフシフト・ジャパン株式会社・取締役 CRO、一般社団法人産学協働人材育成コンソーシアム・理事などにかかわるパラレルワーカー。著書に『なぜ若手社員は「指示待ち」を選ぶのか?』(PHP ビジネス新書)、『若手社員が育たない。』『就活エリートの迷走』(以上ちくま新書)、『「上司」不要論。』(東洋経済新報社)、『新卒無業。』(共著 東洋経済新報社)などがある。

プログラム概要

大学のカリキュラムの中で、重要な位置を占めている専門ゼミナール。少人数+長期にわたる学習機会は、大学生にとっても重要な学びの機会であることは言を俟ちません。しかし、多くの大学において、ゼミナールの運営は個々の教員に託されていて、ブラックボックス化しています。また、そこでの学習成果が卒業後につながっているかどうかの検証もなされていません。

このプログラムでは、大学教員が中核である実践コミュニティ「ゼミナール研究会」での研究探索活動から見えてきた「専門ゼミナール」という学習コミュニティの運営ノウハウ=学生が育つ(卒業後につながる)ゼミの作り方を、受講者の皆さまにお伝えしたいと思います。

受講者の皆さまには、講師の論文「大学教員はどんな行動をしているのか～人が育つゼミに着目して～」(<https://www.works-i.com/research/paper/works-review/works-review-vol13/181109-wr13-10.html>)、ならびにウェブ連載記事「『#大学生の日常』に埋め込まれた学習」(<https://www.works-i.com/project/seminar/campuslife.html>)を精読の上ご参加頂きたいと思います。また、当日は、ショートタイムの個人ワーク、グループワークを織り交ぜたインタラクティブな場を構想しています。皆さま一人ひとりが活きた知見をお持ち帰りいただける時間としたいと考えています。

準備物・事前課題

下記を精読の上ご参加ください。

- 論文「大学教員はどんな行動をしているのか～人が育つゼミに着目して～」

<https://www.works-i.com/research/paper/works-review/works-review-vol13/181109-wr13-10.html>

- ウェブ連載記事「『#大学生の日常』に埋め込まれた学習」

<https://www.works-i.com/project/seminar/campuslife.html>

主な受講対象者

専門ゼミナールを担当している教員

自大学の専門ゼミナールの品質を高めたいと考えている教職員

到達目標

1. 大学生が「大学生の日常」を通じて身に着ける(ことが期待される)態度について説明できる。
2. 大学生が育つ(卒業後につながる態度が形成される)学習環境/コミュニティの要件を列挙できる。
3. ゼミナールにおける上記1. 2. の達成につながる施策を説明できる。
4. ゼミナールのあり方についてともに深め合う仲間を見つけることができる。

日時 8月27日(金)9時30分～11時30分

地域連携担当者のための合意形成術講座

前田 眞（愛媛大学 社会連携推進機構 教授 地域連携コーディネーター
SDGs 推進室副室長 地域協働センター中予副センター長）

講師略歴

昭和 52 年 3 月広島工業大学工学部建築学科卒、平成 4 年 7 月邑都計画研究所設立、平成 17 年特定非営利活動法人まちづくり支援えひめ設立、それぞれの代表を務め、平成 27 年 1 月より愛媛大学社会連携推進機構にて地域連携コーディネーター就任。起業してから 24 年間にわたって地域活動や市民活動の社会的起業支援を実施してきて、まちづくり松山、お城下松山（松山市）、まちづくり郡中（伊予市）、川津南やちっみる会（西予市）、シクロツーリズムしまなみ（今治市）、河辺の未来を考える会（大洲市）、西条市小松町立志隊等のアドバイザーや西予市まちづくりアドバイザー、松山市コミュニティアドバイザーに就任する等のまちづくり組織の設立、運営支援に参画。

プログラム概要

現在の地域社会は、急速な人口減少、超高齢社会、少子社会、商店街に象徴される商業の衰退、地場産業の衰退など、地方は大きな転換点にさしかかっている。それらを打開するために、「地方創生」が叫ばれている。この地方創生の実現に向けては、各地域がそれぞれの特徴を活かした自律的で持続的な地域づくりが求められている。これらの実現に向けて、地域における課題解決への対応とそれに資する人材の育成が求められています。

今回の講義では、地域課題の把握、解決に向けてのノウハウ取得と解決に向けた担い手づくりとして、地域住民をエンパワーメントしながら、多様な団体を巻き込んだ協働型事業の構築、合意形成に向けたマルチステークホルダープロセスの手法について、講義とグループワークによる模擬的な演習を通して学びます。

主な受講対象者

- （例 1）地域の課題抽出や課題解決に向けて地域住民をエンパワーメントすることに係わった経験の少ない教員の方を歓迎します。
- （例 2）地域創生センター等の地域との連携事業に携わっている教職員
- （例 3）地域の課題解決や活性化に向けて活動に興味のある教職員

到達目標

1. 地域の課題やそのとらえ方について説明できる
2. 地域の課題解決に向けた一つのエンパワーメント手法について理解し、実践できる

日時

8 月 27 日（金）9 時 30 分～11 時 30 分

遠隔授業の強みを最大化する 授業設計とは

仲道 雅輝 (愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室副室長 講師)

講師略歴

1995年日本福祉大学社会福祉学部卒、2009年熊本大学社会文化科学研究科教授システム学専攻博士前期課程修了 修士(教授システム学)。2017年熊本大学社会文化科学研究科教授システム学専攻博士後期課程修了 博士(学術)。1995年より日本福祉大学職員。2011年から愛媛大学にてFD・SDや学生能力開発、授業改善・授業コンサルテーションなどの支援に取り組む。主な研究課題は、インストラクショナル・デザインを活用した教育改革に関する研究。(H20年度eLC認定e-Learning Professional、H26年度SDC認定)

主な著書には、ナカニシヤ出版の「大学におけるeラーニング活用実践集—大学における学習支援への挑戦2」(共著)、「大学初年次における日本語教育の実践—大学における学習支援への挑戦3」(編著)、さくら社出版の「教育評価との付き合い方—これからの教師のために」(共著)など。

プログラム概要

遠隔授業は、ICTの進化を背景として発展してきた教育方法のひとつであり、学習効果の向上や学習機会の拡大を目的として行われてきました。コロナ禍を転機として急激な広がりを見せた遠隔授業ではありますが、その本来の機能や特徴を知ること、遠隔授業のみならず対面授業をはじめとするすべての授業をさらに効果的なものにつなぐことができます。

このプログラムでは、遠隔授業を円滑に進めるための環境や要件、メリットを最大化するための視点等についてご紹介し、現行の遠隔授業のブラッシュアップや対面授業とのブレンディッド型への発展方略を考えていきます。参加者の皆さまには、遠隔授業の経験事例や授業運営上の課題を持ち寄っていただきます。グループワークへの積極的な参加を通じて、現実的な授業方略のヒントにつながるディスカッションとなることを期待しています。

主な受講対象者

遠隔授業(オンライン授業)に関わる教職員

到達目標

1. 遠隔授業のメリットを説明できる。
2. 遠隔授業のメリットを活かすためのポイントを列挙できる。
3. 自らの遠隔授業の改善方法を挙げるができる。

日時

8月27日(金)9時30分～11時30分

SD 担当者研修－New Normal 時代に 対応するために－

吉田 一 恵 (愛媛大学教育学生支援部愛媛大学SD統括コーディネーター/能力開発室長)
葛西 崇 文 (大阪女学院大学 教務・学生課 課長)

講師略歴

(吉田一恵) 愛媛大学法文学部法学科卒業。文部事務官として愛媛大学各部署、国際交流センターにおいて主に総務、国際交流を担当。法人化を挟み、広報室長、人事課長、教育学生支援部長を経て平成29年4月から現職。広報室・人事課での約6年間愛媛大学危機管理室副室長を兼務し、記者会見を所掌、報道対応マニュアル等を作成、人事課では、主に人材育成・評価、労務、男女共同参画、人権侵害事案等々に対応、全事務系職員へのスタッフポートフォリオの導入も実施、教育学生支援部では、入学から就職までの学生支援活動、危機管理事案に対応するとともに、現在まで一貫して教職員能力開発拠点 SDC/SPOD-SDC として学内・外において、年間約40件の研修講師他、SDの企画・立案の支援等、職員の能力開発に取り組んでいる。

(葛西崇文) 平成23年から、青森中央学院大学においてSD・FD担当者として各種研修の企画・運営を担当。この間、東北地区大学図書館協議会フレッシュパーソンセミナーや、SDC養成講座 in 大阪などで講師を務める。令和3年3月に弘前大学大学院地域社会研究科(博士後期課程)を修了し、同年4月から現職。

プログラム概要

高等教育機関では、「SDの義務化」を受けて各機関の強みを活かしたSDに取り組んでいます。しかし、新型コロナウイルスの出現により、学内・学外研修を問わず、「待った無し」でICTを駆使し、オンライン形式で授業や研修を行う必要に迫られています。

今後は、このような新たな形式での研修が、New Normal となるでしょう。SD 担当者は、単に研修形式を変えるだけではなく、このような変化を研修変革の好機と考えて、各機関の現状を正しく理解し、New Normal 時代にふさわしい、柔軟かつ戦略的思考ができる人材を育成する研修を実施しなければなりません。

このプログラムでは、そのような人材育成のために必要なSD研修を、企画・運営・評価する基礎的な知識・技能の習得を目的とします。また、参加者間で様々な工夫を共有し、参加者が自大学において活用できる実践的な知識を身につけることを目指します。

準備物・事前課題

事前課題あり。8月中旬にお知らせします。

主な受講対象者

- ①SDを担当する教職員
- ②SDを担当する予定の教職員
- ③SDを担当することに関心のある教職員

到達目標

1. SDとは何かを説明することができる。
2. SD担当者に求められる能力と役割を挙げることができる。
3. SDを企画・運営・評価するための手順を説明することができる。
4. SDを企画・運営・評価するための工夫を共有することができる。
5. SD担当者間の仲間づくり、ネットワークづくりをする。

日時

8月27日(金)9時30分～11時30分

トッパーリーダーセミナー 「大学組織を動かす力を理解する」

中島 英博 (立命館大学 教育開発推進機構 教授)

講師略歴

専門は高等教育論、高等教育マネジメント。三重大学高等教育創造開発センター助教、名古屋大学高等教育研究センター准教授などを経て、2021年より現職。2014年から2021年まで名古屋大学大学院教育発達科学研究科の高度専門職業人養成コースで大学組織論の科目を担当。その他に、授業設計、学習評価、IR等のテーマでFD・SDを担当。

プログラム概要

学内に意図したほど成果が上がらない部署があった場合、その部署を改組したりその部署に適した専門的なメンバーを迎え入れれば、成果が上がるようになるのでしょうか。他のアプローチがあるとしたら、どのような方法で改善できるのでしょうか。

このプログラムでは大学組織の特徴を理解し、どのようにすれば成果が上がる組織をつくれるのかを考える視点を紹介します。組織の問題解決には単一の回答例や処方箋はありません。そこで、複数の視点から大学組織を動かすアプローチを考えることで、組織の問題を複眼的に理解し、所属組織の文脈に合った提案をする準備につなげます。

参加者のみなさまには、これまでの経験の中で組織の再編や組織内の意思決定の場面を思い出し、うまくいったと考える例やうまくいかなかったと考える例にどのようなものがあるかを、参加前に振り返っていただくよう期待します。

主な受講対象者

大学組織の管理職等、チームを率いる立場にある教職員

到達目標

1. 組織を見る5つの視点を説明できる。
2. 5つの視点をを用いて、組織内の問題を分類できる。
3. 組織内の問題に対して複数の解決案を提案できる。

日時

8月27日(金)12時30分～14時30分

若手職員のためのリーダーシップ入門

井村 公一（高知工科大学 学生支援部学生支援課 課長）

講師略歴

2007年高知工科大学職員に採用。これまで、財務、就職支援、監査、学生支援に従事し、2019年4月より現職。

SPOD 次世代リーダー養成ゼミナール第3期（2012-2013年度）修了。2019年度 SPOD-SDC 認定。これまでに SPOD フォーラムや SPOD 研修プログラムにおいて講師を担当。

プログラム概要

あなたが「リーダーシップとは」と尋ねられた時、どのようなイメージを持ちますか？リーダーシップとは、組織やチームをまとめる立場にある人に必要なものというイメージを持っている人が多いのではないのでしょうか。そのため、若手職員の方はリーダーシップが求められるのはまだまだ先のことと考えていませんか。

しかし、リーダーシップは組織やチームをまとめる立場の人だけのものではありません。リーダーシップはそこにいる一人一人が発揮でき、一人一人が発揮することで全体をより良いものに近づけることができるものです。

一口にリーダーシップといっても様々なスタイルがあります。このプログラムでは、リーダーシップの基礎的な知識やそれぞれが持っているリーダーシップのスタイルを知り、それを発揮していく方法を一緒に考えていきます。

これまでリーダーシップを意識したことがなかった方も関心のある方も、一緒に考えていきましょう。

主な受講対象者

若手職員（主に採用1年～5年）

到達目標

1. リーダーシップについて説明することができる。
2. 自己の仕事レベルでリーダーシップを発揮することができる。

日時

8月27日(金)12時30分～14時30分

Blended Learning で 活用できるグループワークのアイデア

村田 晋也 (愛媛大学 教育・学生支援機構教育企画室 講師)

講師略歴

九州大学大学院経済学府博士後期課程満期取得退学。九州国際大学経済学部経営学科専任助教を経て、平成26年9月より現職。専門は経営学（組織論、人的資源管理論、リーダーシップ論）。現所属部署にて、FD・SD、学生の汎用的能力開発プログラムの運営、共通教育科目の担当、初年次科目の授業支援等に従事。大学間連携共同教育推進事業 UNGL 事業推進責任者。

プログラム概要

これまで多くの先生方が、ご自身の担当授業に学生同士のディスカッションや多様な形式のペア／グループワークなど、学生自身が主体的・能動的に授業に参加できるアクティブ・ラーニングの手法を導入されてきたことと思います。しかしながら、コロナ禍において遠隔での授業実施を余儀なくされる等により、例年通りの方法を用いづらくなったり、活用を見合わせなければならなくなったりしたかもしれません。

そこで、このプログラムでは、オンラインで実施できるアクティブ・ラーニングのアイデアを幾つか取り上げ、学生の参加意欲を刺激し、協同的な学習の意義や有効性に気付いてもらうために導入できるアクティビティについて体験的に学んでいただけるよう企画しています。これは“After コロナ”においても、対面／遠隔を併用した Blended Learning として継続的・応用的に活用することができると推察します。研修の中では、先生方のご経験をシェアしていただく機会も設けたいと思います。多くの方のご参加をお待ちしております。

主な受講対象者

授業内でグループワークやディスカッションなどを活用（ないしは導入を検討）している教員の方を歓迎致します。併せて、各種セミナーの講師経験があったり、今後講師を務める予定をお持ちの職員の方々にもご参加いただくことができます。

到達目標

1. 授業への参加意欲を高めるために遠隔で実施できるアクティブ・ラーニングのアイデアの幾つかについて説明できる。
2. ウォーミングアップのアクティビティについて、その意義と有効性を説明できる。
3. 学生の参加意欲を刺激するためのアイデアを体験を通して習得し、自分の授業（ないしセミナー等）への導入を検討できる。

日時

8月27日(金)12時30分～14時30分

大学設置認可申請入門

長山 琢磨 (学校法人東北学院 法人事務局庶務部庶務課 課長補佐)

講師略歴

リサーチマップを御参照ください。(https://researchmap.jp/t-nagayama)

これまで設置認可申請業務として、大学院新設、学部改組、博士後期課程設置及び寄附行為変更認可申請などを一体的に経験してきました。

プログラム概要

大学設置認可制度は、我が国の質保証システムに位置付けられており、大学設置認可申請に事務職員として関わることで、組織改革を通じた教育改革にも繋げられる業務です。しかし、実務を経験しないとイメージしにくい点もあり、担当者になった場合、どのような点に留意して業務を進めればよいか把握しておくことが重要です。

そのためには大学設置認可制度、自組織の文脈・教育実践を統合し、新たな価値の創造に繋げる事務職員の力量が大切です。本講義では、大学設置認可制度の概要を概観し、具体的な事務手続で留意した方がよい点、設置構想の構造化の考え方など、講師のこれまでの経験を織り交ぜて講義を行います。また、途中でケースを用いたワークを実施し、より具体的なイメージが掴めるようにしたいと思います。

準備物・事前課題

朴澤泰男 「現代日本における大学設置認可行政の構造分析のための基礎的考察」 東京大学大学院教育学研究科教育行政学研究室紀要 20 巻 (2001)

<https://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/records/31902#.YK72E5P7SL0>

これからの大学機関の質保証人材育成に関する考察—SPOD フォーラムでの SD 講師経験を通して— (2020)

<http://www.highedu.kyoto-u.ac.jp/forum/kanri/forum/pdf/20200423122726.pdf>

主な受講対象者

設置認可申請業務に関心のある事務職員（経験年数は問いません）。設置認可申請業務は様々な業務領域と関連するため、幅広い層の方の御参加をお待ちしています（教員の方の参加も歓迎です）。

※過去に担当したことのある事務職員の方は、申込フォーム「備考欄」にその旨を記入してください。

到達目標

1. 大学設置認可制度の概要を把握し、我が国の質保証システム上での位置付けについて説明することができる。
2. 大学設置認可制度の事務手続について、事務職員としての留意点を説明することができる。

日時

8月27日(金)12時30分～14時30分

学生と職員の協働へ ーピア・サポートの理論と実践からー

佐々木 菜々 (広島修道大学 入学センター 入学課 主事)

講師略歴

平成 26 年に広島修道大学入職。図書館配属となり、図書館ピア・サポーターの育成・指導やピア・サポートプログラムの運営、利用者教育、図書館の広報などを経験。平成 29 年に入学センターに異動。高校生向けのガイダンスや広報物の作成、サイト分析などを担当。毎年約 100 名の学生スタッフとともにオープンキャンパスをはじめとした学生募集イベントの企画・運営に取り組む。日本ピア・サポート学会所属。

プログラム概要

2000 年に「廣中レポート」で学生中心の大学への転換や正課外活動の重要性が提示されて以降、多くの大学で学生支援のための取り組みが展開されてきました。

本プログラムでは、その中でも、学生が支援する側となり、職員と協働して行う学生支援活動を題材とします。より教育効果の高い活動とするための考え方や手法について、“指導者のもと仲間同士で援助し学びあう教育的な実践活動である”ピア・サポートの理論と実践に基づいてお話しします。

まず前半の理論編では、ピア・サポートの定義やピア・サポートプログラムの構造などについて説明します。続いて後半の実践編では、本学図書館と入学センターにおける活動事例をご紹介します。また、皆さんに学生対象の研修で行っているコミュニケーションのワークを体験していただく予定です。

「初めて学生支援活動の担当になり、学生との関わり方に悩んでいる」「学内でピア・サポート活動をやってみたいけど、何から始めれば良いか分からない」「職員として、学生支援に関する知識・スキルを身につけたい」そんな皆さんのご参加をお待ちしております。

主な受講対象者

以下のような職員の方（入職 1～10 年目くらい）の参加を想定しています。

- ・学生と職員が協働して行う学生支援活動の担当者
- ・学生支援業務やピア・サポートに興味のある方

到達目標

1. ピア・サポートの理論を理解し、説明できる。
2. プログラムで学んだピア・サポートの知識・スキルを業務や日常生活で活かすことができる。
3. 所属大学における学生支援活動の企画ができる。

日時

8 月 27 日(金) 15 時 00 分～17 時 00 分

面談に役立つ アカデミック・アドバイジングの技法

清水 栄子 (追手門学院大学 基盤教育機構 准教授)

小林 忠資 (岡山理科大学 獣医学部 講師)

講師略歴

(清水栄子) 広島大学教育研究科人間科学専攻博士課程修了(博士(教育学))。国立高等専門学校法人阿南工業高等専門学校 FD 高度化推進室特命講師、愛媛大学教育企画室助教、講師などを経て、2018年9月より現職。日本アカデミック・アドバイジング協会(JAAA)会長。著書に『アカデミック・アドバイジングーその専門性と実践ー日本の大学へのアメリカの示唆』(単著)がある。

(小林忠資) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科教育科学専攻博士後期課程満期退学。名古屋大学高等教育研究センター研究員、愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室特定研究員、特任助教を経て、2018年4月より現職。日本アカデミック・アドバイジング協会会員。

プログラム概要

アカデミック・アドバイジングとは、学生の目標設定とその達成に向けて学生のニーズに沿った支援を行っていくものです。たとえば、履修に関する情報提供と相談、学習状況の確認と助言、進路の相談などです。アカデミック・アドバイジングは新しい言葉ではありますが、内容的にみるとこれまで教職員が面談等によって日常的に行ってきた活動ともいえます。米国のハンドブック等で紹介されているアカデミック・アドバイジングの主な技法を学ぶことを通して、教職員個々が経験をもとに構築してきた自分なりの面談の方法を捉えなおす機会になればと考えます。

本プログラムでは、面談に役立つアカデミック・アドバイジングの技法について学習します。まず、アカデミック・アドバイジングの特徴と基本的な技法を説明します。その後、事例をグループで検討し、技法への理解を深めます。

主な受講対象者

アカデミック・アドバイジングに関心のある教職員
学生面談を行っている教職員

到達目標

1. アカデミック・アドバイジングの特徴を説明することができる。
2. 面談におけるアカデミック・アドバイジングの技法を3つ以上挙げることができる。
3. 面談において学生の状況に応じて、アカデミック・アドバイジングの技法を活用できる。

日時

8月27日(金)15時00分~17時00分

大学教職員のための Zoom 百物語

石井 知彦 (香川大学 創造工学部先端材料科学領域 教授)

講師略歴

平成3年東京工業大学理学部化学科卒業、平成5年同修士、平成8年同博士修了。これまでいわき明星大学、東京都立大学で勤務。平成14年度から現職。現在は香川大学学長特別補佐、創造工学部副学部長、大学教育基盤センター能力開発部長を併任。

プログラム概要

オンライン授業・会議が急に始まりました。当初は戸惑っていた教職員の皆さんも、今ではすっかり Zoom に慣れた頃だと思います。この講座では、この一年間に皆さんが経験したであろう Zoom の四方山話を紹介するとともに、Zoom の奥深さを一緒に考えていきたいと思います。Zoom 初心者の方は大歓迎です。Zoom の達人の方にも、目からウロコの楽しいテクニクをたくさん持って帰っていただきます。

【内容】

○49 人以上のギャラリービューを表示したい。○授業中に来客が来たら？○聞こえますかー？分かりますかー？○この先生、手書きで下ばかり向いて何やっているんだろう？○パソコンが落ちた。どうする？○カメラはオフでもいいの？○画面共有の切り替えが面倒。○iPad に手書き、画面が狭すぎる。○パワポを画面共有すると自分の顔が映らない。

【さらに】

○留守宅のワンちゃんを見守ります。○小学生は Zoom で鬼ごっこ。

主な受講対象者

- ・ Zoom を一度も使ったことがない教職員
- ・ Zoom をある程度使ったことがある教職員
- ・ Zoom を使って何か困ったことを経験したことがある教職員
- ・ Zoom の達人。

到達目標

1. Zoom でこれまでに経験した困りごとを解決することができる。
2. Zoom のより便利な使い方を理解し、今後授業や会議で実践することができる。
3. Zoom をより便利に使うための周辺機器について説明することができる。

日時

8月27日(金)15時00分～17時00分

これからの社会と大学をつなぐ SDGs

塩川 雅美 (大阪市立大学 高等教育研究院 特任教授)

講師略歴

博士(学術)。2005年に神戸大学大学院国際協力研究科地域協力政策専攻博士課程修了。1988年より私立の中小規模大学の職員、国立大学教員、公立大学教員等経験。JAFSA(日本国際教育交流協議会)常任理事、大学マネジメント研究会理事等歴任。「大学の国際化」「教職員の能力開発」の研修を企画、運営、実施。大学コンソーシアム大阪のSD研修事業の立ち上げ支援等の「大学の連携事業」も担当。2014年7月に愛媛大学教職員能力開発拠点よりSDCの認定を受ける。2019年7月イマココラボより「2030SDG公認ファシリテーター」認定。2019年10月金沢大学SDGs推進センターより「THE SDGs Action cardgame X(クロス)」ファシリテーター認定。

プログラム概要

文部科学省の「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」を受け、各大学は大学改革を推進していました。しかしながら、COVID-19の出現によって、人口推計より5年前倒しで人口減少が起き始めています。また、我が国のデジタル化対応の遅れが露見したとはいえ、オンラインで学ぶことや働くことも一気に推し進められることとなりました。COVID-19は「人類共通の課題」の存在を認識させ、「課題解決」を「自分ごと」として取り組まねばいけないことも体感させました。皮肉にもCOVID-19の出現によって、2015年に国連全加盟国が一致して採択しながらも「自分ごと」の実感の薄かったSDGsへの関心を加速度的に高めることとなりました。今こそ、「高等教育機関」としてSDGsの課題解決に貢献するための一歩を踏み出さねばなりません。このプログラムでは、SDGs達成に向けた社会の動きについての情報提供を行い、受講者が具体的に一歩を踏み出すきっかけをつかむことを目指します。

準備物・事前課題

受講者の所属機関でSDGsの課題解決に取り組んでいる場合は、その紹介が行える資料をご用意ください。

主な受講対象者

所属機関内でSDGsの推進を担当する(予定ふくむ)教職員を優先しますが、「これからの社会と大学をつなぐこと」や「SDGs」に関心のある教職員も歓迎します。

到達目標

1. SDGsの達成が「これからの社会」にとって必要な理由を説明できる。
2. 「これからの大学」にとってSDGsの達成に貢献することが必要な理由を説明できる。
3. 自分の所属機関がSDGsの達成に貢献できる方法について述べるができる。

日時

8月27日(金)15時00分~17時00分